

ともに悲嘆を生きる ——童謡の時代を振り返る——

島 蘭 進

1. 「ふるさと」と死生観

1.1. 「故郷」へ帰るという「うた」

近代科学が広まり死生観が変化して、死別に伴う喪の文化が失われていく。親しい人の死を経験し、葬儀等の儀礼に加わって悲嘆をともにする一子供がこのような経験をしにくくなっている。すでに1960年代にイギリスの社会人類学者、ジェフリー・ゴラー（1986（1965））はそのように論じていた。だが、20世紀のその頃までは、大人も子供もともに悲しい歌を歌うという機会が多かったように思う。しかし、1980年代頃からそのような経験も後退していったのではないか。悲嘆を分かち合う儀礼が後退し始めた後も、悲しみを分かち合う「うた」はなお力を保持していた。だが、それも危うくなってきた。

悲しみを分かち合う懐かしい「うた」には「唱歌」や「童謡」や「歌謡曲」がある。「唱歌」の例は、高野辰之作詞の『故郷』である。2017年は上智大学グリーンケア研究所の名誉所長であり、日本スピリチュアルケア学会の理事長だった日野原重明先生が105歳で亡くなった。私はそのご葬儀と日本スピリチュアルケア学会の追悼の集いに参加したが、どちらでも「故郷」が演奏されたり、歌われたりした。日野原先生ご自身が愛好された歌ということだった。

兎追いしかの山 小鮎釣りしかの川
夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷
如何にいます父母 恙なしや友がき
雨に風につけても 思い出ずる故郷
志をはたして いつの日にか帰らん

山は青き故郷 水は清き故郷

この歌は1914年に『尋常小学唱歌』に掲載された文部省唱歌である。「唱歌」は明治期以来、国が主導権をもって作り、学校などを通して広めたもので、道徳的教訓や知識の記憶に役立つというものも多い（渡辺裕2010）。

1.2. 古くなった「故郷」

この歌を歌って涙が出るのは、帰りたいけれども帰れない故郷の美しい自然と懐かしい人々を思うからだろう。その自然はもう失われているかもしれない。人々ももう世を去ってこの世にいないかもしれない。自分のいのちを育てた父母や環境、自分のいのちと分かちがたかった大切なものの喪失に思いをいたすから悲しいのだ。だが、その尊い故郷はまだ残っていて帰っていける可能性がある。その希望も伝えている。「喪失のうた」であると同時に「望郷のうた」でもある「故郷」という歌は私も好きな歌だったが、私が大学生だった1970年頃には、この歌は時代遅れで歌われなくなっていくだろうと感じていた。それはまず、豊かな自然環境がある故郷があると感じている人が減っていくだろうということがあった。私自身、東京生まれで10歳までは東京で暮らしたが、その間に二つの区の三つの場所に住んだ。三つ目の住まいはコンクリートの四階建て二棟のアパートの四階だった。10歳から18歳までは石川県金沢市に住んだ。ここは自然環境が豊かで山や川が近く、蛙はうるさく、ほたるもいたし、農作物にふれたり、川で泳ぐこともあった。「故郷」というと東京より金沢という感じだ。もしずっと東京に住んでいたなら、故郷があるとは感じなかったのではないだろうか。

1.3. 「故郷」がまた歌われるようになった

ところが、昨今は「故郷」はどうも人気を取り戻したのではないかと感じている。一つには、東日本大震災と福島原発災害後に「故郷」の歌を聞く機会が増えた。津波と原発事故で美しい東北日本の自然が破壊された。津波の被害は自然災害だが、その後に巨大防潮堤ができて景観と生活環境の双方が悪化したと感じた人は多かった。原発事故がもたらした放射能による環境汚染は、多くの避難者・移住者を生み出した。「故郷喪失」が嘆かれ、故郷の

自然・人間双方の環境を取り戻すことが願われた。一人一人にとっての故郷というよりも、人間と生き物のいのちを育む環境としての「故郷」が失われていくことを嘆き、その回復を願うという心情がこの歌に託されるようになったのだ。いのちを生み育む母なる大地という意味合いが「故郷」の言葉に込められるようになった。

まったく異なる文脈でも、「故郷」は人気を得ているようだ。上智大学グリーンケア研究所の高木慶子名誉所長によると、今の高齢者世代に限定してのことであるが、死が間近な人が枕元で聞きたいと願う曲のなかで、「故郷」は一、二を争うということだ。そういえば、とって歌詞を見直すと、一番は自らのいのちの源である自然への感謝、二番は親や家族や同郷の人々とのつながりの確認と感謝と読める。そして三番目だが、「志をはたして いつの日にか帰らん」というのは、自分の一生を振り返り、自分の人生の総体を受け入れて、世を去る心を定めていくことが示されている。そして、高木慶子シスターは「いつの日にか帰らん」というのは、母のふところに帰るといふことかもしれないし、大なるもののもとに帰っていくということかもしれない。いずれにしろ、この歌詞を聞きながら安らぎの場、「魂のふるさと」に行くと感じ取ることができるのだという。故郷を思うことで、死といのちの源が一体のものと感じられていくのだ。故郷喪失が切迫感をもって感じられることで、かえって望郷の念に現実味が高まっているかのようだ。

1.4. 妣が国へ常世へ

「魂のふるさと」ということでは国文学者であり、民俗学者であり、詩人でもあった折口信夫が思い起こされる。折口信夫は「母のふところに帰る」というような望郷の念と、日本人の死生観を重ね合わせて捉えようとした。

1929年に刊行された『古代研究 民俗学篇1』（『折口信夫全集』〔以下、全集と略す〕第2巻、1965）の冒頭に収録された「妣が國へ・常世へ―異郷意識の起伏」は日本・沖縄の民俗文化に見られる円環的、永遠回帰的な時間意識を巧みに表現した名文としてよく引用されるものだ。

十年前、熊野に旅して、光り充つ真晝の海に突き出た大王ヶ崎の盡端に立つた時、遙かな波路の果に、わが魂のふるさとのある様な気がしてならなかつた。此をはかない詩人氣どりの感傷と卑下する気には、今以

てなれない。此は是、曾ては祖々の胸を煽り立てた懐郷心の、^{のすたるじい} 間歇遺伝^{あたみずむ}として、現れたものではなからうか。

すさのをのみことが、青山を枯山なすまで慕ひ歎き、いなひのみことが、波の補を踏んで渡られた「妣が國」は、われへの^{おや}祖たちの恋慕した魂のふる郷であつたのであらう。いざなみのみこと・たまよりひめの還りいます國なるからの名と言ふのは、世々の語部の解釈で、誠は、かの本つ國に関する萬人共通の憧れ心をこめた語なのである。(5-6)

「アタヴィズム atavism」は「先祖返り」「隔世遺伝」などの訳語が与えられる用語。予期せぬ時に古い思考や情念が蘇ってくる人間精神のあり方に注目している。折口は母であるイザナミと異なるこの世にいるスサノオの悲嘆と、母がいる死者の国に帰りたいという望郷の念に日本人の死生観の原型を見ようとした。

宗教から遠ざかり死生観を見失ったかに見え、新たにグリーンケアが求められるようになった現代日本人だが、あらためて伝統的な死生観をつかみ直そうとしているのかもしれない。グリーンケアは伝統的な死生観という資源をさまざまに活用しつつ、現代人の心のあり方になつた「悲嘆の文化」を求めようとしている。

2. 童謡と悲しみ

2.1. 野口雨情と悲しい歌

「故郷」は唱歌だが、国が国民に供給しようとした唱歌にかわって、子ども心をすなおに表現するような「童謡」の創作が大きな人気を集めた時期がある。それは、折口信夫が「妣が國へ・常世へ―異郷意識の起伏」を発表した時期と重なっており、大正時代の半から昭和初期にかけてのことである。

金田一春彦『童謡・唱歌の世界』(2015)によると童謡の作詞家でもっとも人気があつたのが野口雨情である。『童謡・唱歌の世界』で金田一はこう述べている。

私は愛宕山でNHKの放送が始まった大正十四年(一九二五)から昭

和五年（一九三〇）までの子どもの歌を統計にとってみたが、その結果、作詞家としては野口雨情・北原白秋・葛原しげるがビッグ・スリーで、ことに雨情は、中山晋平の曲を得た「雨降りお月さん」「証城寺の狸囃子」が一位・二位を占め、「あの町この町」「木の葉のお船」「鶯の夢」も上位に食いこんでいることから、断然、二位の北原白秋を引き離していた。（182）

その野口の童謡の歌詞¹⁾には、親のない子、みなし子が登場することが多い。（金田一 2015, 12）

『十五夜お月さん』は下のような歌詞だ。

十五夜お月さん ご機嫌さん 婆やは お暇取りました
十五夜お月さん 妹は 田舎へ もられて ゆきました
十五夜お月さん 母さんに も一度 わたしは 逢いたいな

『畑』は次のようなものだ。雨情の故郷である茨城県北茨城市の磯原の情景を描いたものとされる。

お背戸の 親なし はね釣瓶
海山 千里に 風が吹く
蜀黍畑も 日が暮れた
鶏さがしに 往かないか

この歌詞について、雨情は生家での経験に根ざしたものだと言っている。唐黍畑はさわさわと「野分けが吹いて、日も早や暮れようとしておるのに、鶏はまだ帰って来ない。お背戸（家の裏口—島蘭注）の井戸端のはね釣瓶よ、お前も親なしの一人ほっちで、さぞ、さびしいだろう。私と一緒に鶏をさがしに行かないかという、気持を歌ったのであります」。（野口 1925, 229）

故郷から遠くへ去った子どもを主題としたあまり知られていない歌だが『兎』の歌詞を見てみよう。

兎はどちらへ ゆきました
十五夜お月さんに つれられて 遠い 遠い お国へ ゆきました
お月さんの お伴をして行ったの
お月さんに つれられて 行ったわよ
兎は 帰って来ないわね
お月さんの子供になっちゃって 兎は帰って 来ないわね
お月さんのお国で ぼったんこ
よいよい もひとつぼったんこ
お餅ついて 兎は いるんだよ

『赤い靴』、『青い眼の人形』、『七つの子』(いずれも 1921 年) など、どれも子どもが母や故郷から離れている情景が浮かんでくるものだ。死んだ子どもを思う歌と解釈されてきた『シャボン玉』(1922 年) も、そう思うからか悲しみを歌った歌と感じられるだろう。

シャボン玉 飛んだ 屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで こわれて消えた
シャボン玉 消えた 飛ばずに消えた
生まれて すぐに こわれて消えた
風 風 吹くな シャボン玉飛ばそ

この童謡の「うまれて すぐに こわれて消えた」という歌詞は、死んだ子どものことを思うものだという。伝記的事実に照らし合わせると、雨情は最初の妻、ヒロとの間の長女、みどりを 1908 年に生後間もなく喪い、二番目の妻、つるとの次女、恒子、長男、九万男を 24 年、31 年に喪っている。これらは作詞の時期とは符合しない。だが、スペイン風邪だけでなく夭折が多かった時代、子どものいのちの脆さはかなさが念頭にあったというのは確かだろう。雨情の弟子の古茂田信男は、人々がこれを亡児への鎮魂歌と解したのは、まんざら故ないことではないとしている (52)。

2.2. 浄土信仰と「魂のふるさと」の連続性

折口信夫は「甍が国」のモチーフを広く日本の宗教史・文学史・芸能史・文化史に読み取っていったが、それは仏教にも及んでいる。平安時代以来、影響力を増していく西方極楽浄土への信仰に、「魂のふるさと」への憧憬が宿っていると捉えられる側面があることを示したのだ。1943年に発表された小説『死者の書』の、作者自身による解説とも見ることができる「山越しの阿弥陀像の画因」という文章がある（折口 1944、1968）。

「山越しの阿弥陀像」というのは、阿弥陀仏が二つの山の間から上半身を露わにした姿を描いたもので、『往生要集』を著した源信²⁾が比叡山で感得したと言われる。山の向こうから阿弥陀仏がやってくるというイメージは、いかにも山が多い日本の風土に合致している。源信は奈良県の二上山の麓にある当麻の出身である。源信が「山越しの阿弥陀像」を感得したとき、西方極楽浄土から娑婆世界にやって来る阿弥陀仏を幻視しつつ、また、故郷の当麻の地から西方の二上山の彼方に沈み行く日を幻視したとも捉えることができる。

当麻寺が建立されたのは古いようだが、八世紀半ばすぎに藤原南家の^{いら}郎女、中將姫がここにこもり、「当麻曼荼羅」を織ったとされる。『死者の書』では、中將姫は当麻寺のすぐ北方にある二上山に現出する阿弥陀仏を憧れて当麻寺に身を寄せたが、二上山には天智天皇の皇子である大津皇子の墓があり、その怨霊が宿る場でもあったという設定である³⁾。

2.3. 日想観と四天王寺東門

「当麻曼荼羅」は極楽浄土にいます阿弥陀仏を描いた浄土変相図（浄土曼荼羅）で、周囲には『観無量寿経』が示す一六の観法が描かれている。一六の観法の第一が「日想観」である。『観無量寿経』の現代語訳から引こう。

さあ、まわりをキョロキョロ眺めずに、落ち着いて私たちの心の故郷。西の方向に向かうがよい。そのためには今どうすればよいのだろうか。だれでも生まれた時から眼の見えない人でないかぎり、西方に沈み行く夕陽を心に浮かべることができるであろう。その夕陽を心に描き、差別なくだれもが家路に急ぐ西の方に正しく向かい座るがよい。はつき

りとその姿が見えるまで心を集中し、余計なことを考えないようにしなさい。陽が沈もうとして、空から鼓を下げたような姿をしっかりと捉えて、眼を閉じて特別な修行を積む時も、眼を開いて日常の仕事に取り組む時も、その姿をありありと見えるまで続けるがよい。

これを日想観の修行と名づけ、第一の精神統一の方法と呼ぼう。(高松信英 2000, 50-51)

当麻曼荼羅のこの日想観を表した部分は、阿闍世に殺害されたマガダ国王の妃、韋提希が水の彼方に太陽を配する図柄になっている。これが山越の阿弥陀像に変容したのは、日本の地理的条件によるところもある。しかしそれはまた、日本の各地で彼岸中日に行われた太陽を拝する民俗信仰とも関わりがあると折口は述べている。まずは、折口の育ちの地であり、大阪湾からさらに瀬戸内海を望む大阪四天王寺の光景が描かれる。

四天王寺西門は、昔から謂はれてゐる、極楽東門に向つてゐるところで、彼岸の夕、西の方海遠く入る日を拝む人の群集したこと、凡七百年ほどの歴史を経て、今も尚若干の人々は、淡路の島は愚か、海の波すら見えぬ、煤ふる西の宮に向つて、くるめき入る日を見送りに出る。(折口 1968, 184)

2.4. 金子みすゞと『燈籠ながし』

折口は日本人の心に根づいた浄土信仰が、西に沈みゆく日を拝しそこに西方の魂のふるさとを思い描く信仰とつながるものと見なしている。これを夕日への愛着と見なすと、現代日本人の心性にもさほど遠くはないものであることが感じられるだろう。浄土真宗の信仰地域で生まれ育ち、死と悲しみをたたえた童謡歌詞で彗星のように現れ去って忘れられ、1980年代に再発見され、今も愛好者の多い金子みすゞ(1903-30)の作品を見てみよう。

最初に童謡歌詞を投稿したのは1923年で、西條八十に高く評価され、多くの作品を投稿したが、夫との不和がもとで1930年、26歳で自らのちを断った。よく知られている作品『大漁』の歌詞は「朝やけ」から始まる。

朝やけ小やけだ 大漁だ 大ばいわしの 大漁だ

はまは祭りの ようだけど
海のなかでは 何万の いわしのとむらい するだろう。

光が十分に届かぬ海中は、地下とともに死の領域を表すことがある。アンデルセンの「人魚姫」を思い起こしてもよい。スサノオや稲飯尊が「妣が国」とよんだのは、地下でもあり海中、あるいは海の彼方の死者の世界でもあった。『燈籠ながし』は次のようなものだ。

流した 燈籠は、ゆれて流れて どこへ行た
西へ、西へと かぎりなく、海とお空の さかいまで。
ああ、きょうの、西のおそらの あかいこと。

金子みすゞの生まれた山口県長門市仙崎は日本海に面する漁村である。家は書店を営んでいて、満 20 歳になる頃、本店のある下関に移った。この地域は浄土真宗の信仰の篤い地域で、仙崎では毎日のように沈む夕日が見られただろう。そこで、燈籠流しが行われるのはお盆だろうか。死者の魂がいのちの源へと帰っていく、そのことを祈るためにもし火を海に流すのだ。「昨夜」流したともし火は闇に消え、もちろん今は見えない。そして「きょう」の夕方、まっかな夕焼けが現れ、再び闇へと沈んでいく。死者の魂が西方極楽浄土へと、あるいは「妣が国」へと流れ着き、遺された者に夕焼けとなってそのことを知らせに来た、かつて人々はそのように感じたのかもしれない。

3. たましいの帰る場所

3.1. 夕日とふるさとの「うた」

西方極楽浄土に流れていく灯を描く金子みすゞの『燈籠ながし』は、童謡の歌詞として創作されたものである。金子みすゞが「西のおそらの あかいこと」と詠った数年前、三木露風作詞の『赤とんぼ』（1921年）が作詞されている。

夕焼け、小焼の、あかとんぼ、負はれて見たのは、いつの日か。

山の畑の、桑の実を、小籠に、つんだは、まぼろしか。
十五で、姐やは嫁にゆき、お里の、たよりも、たえはてた。
夕やけ、小やけの、赤とんぼ。とまつてゐるよ、竿の先。

童謡には「夕焼け」を、また「夕日」や「日暮れ」を題材にしたものが多い。私の家の近所では、午後五時になると、毎日、「夕焼け小焼けて日が暮れて 山のお寺の鐘が成る 御手手つないで皆帰ろ からすと一緒に帰りましょ」のメロディーが流れてくるが、この歌詞の題は『夕焼け小焼け』（1919年）で中村雨紅によるものだ。葛原しげる作詞『夕日』（1921年）には「ぎんぎんぎらぎら 夕日が沈む ぎんぎんぎらぎら 日が沈む」とある。これらはたぶん「母のいる家に帰る」情景と関わりがある。また、失われた故郷を懐かしむ望郷の心情にも関わりがある。ここには喪失と悲嘆のテーマが潜んでいる、そう感じる人も多いだろう。

野口雨情にも夕方、家に帰る歌は多い。『あの町この町』（1924年）は知っている人が多いだろう。

あの町この町 日がくれる日がくれる
今来たこの道 帰りゃんせ 帰りゃんせ
お家がだんだん 遠くなる 遠くなる
今来たこの道 帰りゃんせ 帰りゃんせ

『七つの子』はからすの親子を主題としている。

鳥 なぜ啼くの 鳥は山に 可愛七つの 子があるからよ
可愛 可愛と 鳥は啼くの 可愛 可愛と 啼くんだよ
山の古巣へ 行って見て御覧 丸い眼をした いい子だよ

3.2. 『椰子の実』と海の彼方の詩情

夕日と海の彼方ということでは、島崎藤村（1872-1943）の『椰子の実』（1901年）があり、大中寅二が曲を付けたのは1936年である。童謡ではなく唱歌に分類される。

名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ
故郷の岸を離れて 汝はそも波に幾月
旧の樹は生いや茂れる 枝はなほ影をやなせる
われもまた渚を枕 孤身の浮寝の旅ぞ
実をとりて胸にあつれば 新なり流離の憂
海の日沈むを見れば 激り落つ異郷の涙
思いやる八重の汐々 いずれの日にか国に帰らん (島崎藤村 1999)

ここでも望郷の念が海に沈む日と重ね合わされている。この新体詩について、藤村の後輩だった柳田國男 (1875-1962) が、晩年の 1959 年に刊行した『故郷七十年』⁴⁾ で語っている。21 歳の頃の柳田が体調が悪く渥美半島の伊良湖崎で一ヶ月静養していたとき、海岸を散歩していると、南の島々から流れ着いた椰子の実に出会う。暴風の後などにとくに多い。それが「實に嬉しかつた」という。東京に帰った柳田は、近所に住む藤村にそのことを話した。「そしたら「君、その話を僕に呉れ給へよ、誰にも云はずに呉れ給へ」といふことになつた」という。

藤村はこの柳田の話にインスピレーションを得たということだろう。『椰子の実』という詩がまとまる背景に、藤村と柳田の双方が伊良湖崎の椰子の実に「海の彼方の魂のふるさと」を連想したという事実があった。すでに記したが、折口信夫が紀伊半島の大王崎で「遙かな波路の果に、わが魂のふるさとのある様な気がしてならなかつた」と感じたのは 1910 年頃のことだった。藤村、柳田、折口の体験と詩的イマジネーションはどこかで通じ合っている。しばらくすると、この「魂のふるさと」への思いは童謡のなかの夕日と「帰るべき場所」の形象に宿るものとなっていった。

3.3. 「魂のふるさと」の信仰

明治維新からアジア太平洋戦争に至る時期に、「魂のふるさと」を喚起する詩的音楽的表現が人々の心をつえたことを見てきた。だが、これは詩歌を作る文人や文人志望の若者たちだけのことではない。この時代の日本に「魂のふるさと」に深い信仰を寄せる宗教運動が広く展開していたことを思い出したい。近代日本の精神史の底流の一つをなすものと言える。

たとえば天理教である。今も奈良県天理市を訪れると、そこここに「よう

こそおかえり」の標語が掲げられている。天理教の本部神殿がある場所は人類のふるさとであり、その聖地への参詣は「おぢばがえり」とよばれる。「おぢば」とは「親神が人類を創造された元の地点」（天理大学附属おやさと研究所 2018）とされる。1937年（天保9年）、この地で教祖、中山みきに「元の神・実の神」が宿り、人類救済の道が始まった。この神は、「月日」とか「親神」などともよばれ、唯一神であるとともに、両性の二神としても、宇宙・身体・諸機能を司る十柱の神としても表彰される。

やがて、1875年（明治8年）、中山家があったこの地は親神が泥海から大地・生物・人類を生み出していったすべての根源の場所であり、人類創造の元の地であることが明かされる。天理教でもっとも重要な儀礼である「かぐらづとめ」は、毎月、26日に本部神殿で行われる。月日親神による人類創造の神話的場面が仮面をかぶった演者らを変え、再現されるのである。神話的な「原初の時」が世界の中心において具現される。それがまた人類のいのちの源への永遠回帰ともなる（ミルチャ・エリアーデ 1963（1949））。

4. 世界的な同時性

4.1. 明るい童謡もある

しかし、日本の「童謡」で野口雨情のように悲しみをよびます詩人（作詞家）の作品が高い人気を保ってきたのはなぜだろうか。もちろん明るい歌もある。たとえば、百田宗治『どこかで春が』と海野厚『おもちゃのマーチ』はともに1923年の作品だ。

『どこかで春が』

どこかで「春」が 生れてる、 どこかで水が ながれ出す。
どこかで雲雀が 啼いている、 どこかで芽が出る 音がする
山の三月 そよ風吹いて どこかで「春」が生まれてる

『おもちゃのマーチ』

やっこやっこ くりだした おもちゃのマーチが らったった
人形のへいたい せいぞろい おうまもわんわも らったった
やっこやっこ ひとまわり キュービもぽっぽも らったった

フランス人形もとびだして ふえふきやたいこが ぼんぼらぼん

野口雨情の『人買船』はだいぶトーンが異なる。

人買船に 買われて 行った
貧乏な 村の山ほととぎす
日和は続け 港は 凧ぎろ
皆さんさよなと 泣き泣き 言った

4.2. ロンドンデリーの歌

悲しみをたたえた歌が好まれるという事態は日本に限ったことではない。アイルランドの都市、ロンドンデリーの名を冠した『ロンドンデリーの歌』のメロディーは日本人でもよく知っている人が少なくないはずだ。この歌がよく歌われるようになったのは、19世紀の末ごろかららしい。さまざまな歌詞がついて、男女の愛の歌にもなり、去っていった息子を思う歌にもなった⁵⁾。

北国の港の町は リンゴの花咲く町
したわしの君が面影 胸に抱きさまよいぬ
くれないに燃ゆる愛を 葉かげに秘めて咲ける
けがれなき花こそ君の かおりゆかしき姿 (近藤玲二訳詞)

わが子よ いとしのを 父君の形見とし
こころしてしみつ きょうまで育て上げぬ
古き家を巣立ちして 今はた汝は
よわき母の影さえも 雄々しき汝には見えず (津川主一訳詞)

そして、1913年にフレデリック・エドワード・ウェザリ(1848-1929)による『ダニー・ボーイ』という歌詞がついて、以後、この歌詞でよく歌われるようになった。1914年には第一次世界大戦が始まっている。

おおダニーボーイ いとしきわが子よ いずこに今日は眠る

いくさに疲れた体を やすめるすべはあるか
おまえに心を痛めて 眠れぬ夜を過ごす 老いたるこの母の胸に
おおダニーボーイ おおダニーボーイ 帰れ
(なかにし礼 訳詞)

4.3. アリランの歌詞

『ロンドンデリーの歌』にはさまざまな歌詞が付けられてきたようだ。だが、その基調はともに暮した場を去っていった者への篤い思いだ。喪失の歌であり、去って行った者に共鳴するとすれば望郷の歌とも言うことができるだろう。

喪失と望郷の歌ということで私がよく似ていると感じるのは、韓国・朝鮮の『アリラン』である。現在、広く歌われている歌詞の『アリラン』が爆発的に広まったのは、1926年に上映された羅雲奎の映画『アリラン』によるという(宮塚利雄 1995)。だが、その前から「アリラン」のさまざまなヴァージョンが歌われていて、歌詞は地方ごとに書き写されてもきた。といっても、実際には即興的な歌という要素をもっており、次々と替え歌が作られてきたようだ(草野妙子 1984)。草野妙子が『アリラン』とよぶ京畿道地方のアリランがもっともよく知られているものだ(34-25)。

アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く
私を捨てて行く君は 十里も行かずに足が痛む(十里は日本の一里)
アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く
青天の空(夜空のこと)には星が輝き 悲しみ燃える胸の奥
アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く
花が咲き 楽しげに蝶が舞い 小川の水かさが増して谷に渦巻く
アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く
行こう 行こう 急いで行こう 白頭山の麓に 夕日が暮れる
アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く
豊年が来るんだと 豊年が来るのよ 江山の三千里(祖国のこと) 豊
年が来るのよ
アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く
青い夜空に 雁はどこへ行く 私の夫の消息を伝えてよ

「喪失と望郷の歌」と言ってもよく、悲しみが貴重にある。だが、喜びもある。さまざまな情感を込めて歌うことができる。喜びも悲しみもともに分かち合う歌なのだ。

アリランの歌われ方では、「アリラン峠」なるものがどこにあるのか。「ここがアリラン峠だ」と称される場所はいくつもあるそうだ。そもそも「アリラン」の意味がよくわからない。「越えて行く」までの前半は、もともと意味がない囃し言葉として広まったものとされる。『アリラン』の歌われ方を、草野妙子は以下のように述べている。

この歌は二部分に分けられる。前半はくり返しの句で、一般に大勢で歌う。ただ囃し言葉のように歌い、後半の歌詞とは意味のうえで何の脈絡もない。後半の歌詞を引き出すための句である。これに対し、後半のフレーズ（句）は、一般に独唱する。独唱者は、元来即興的にフレーズに合うように歌詞をつくって歌っていたが、現在では、いくつかのすてにつくられた歌詞があつて、それらのなかから即興的に選んで歌う。大ぜいのなかから、順番に独唱するのである。(39)

「十里も行かずに足が痛む」というのがもっともよく歌われる句だ。この句は恋人が去ってしまうのを嘆く歌として理解するとわかりやすい。だが、戦争に行く息子たちを送る思う母親の心と解することもできる。こう解釈すると、『ダニーボーイ』とよく似ている。どちらの意味にもとれるのは『ロンドンデリーの歌』に似ている。「十里も行かずに足が痛む」の句について、草野は「それはどういう意味でしょう？」とたずねてみて歩いたという。五十を過ぎた一人の女性の応答は、以下のようなものだった。

「故郷を離れて中国や日本に行ってしまう人は、十里も行かずに足が痛むのよ。ふるさとを離れても、心が……ああ、よくわからない。」ものはっきりと主張する人びとなのに、めずらしく言葉を濁した。そして、再びすごい迫力で歌い出した。(38)

国民と故郷と悲しみ『ロンドンデリーの歌』や『アリラン』にはさまざま

な内容を盛り込めるのだが、それは同じ仲間と感じ合う多くの人びとの共感が背後にあるからだろう。「さまざまな内容」と述べたが、そこにはまず暖かい故郷や親子の情愛あふれる絆の像がある。他方、その絆から離れて去って行った、あるいは旅立って行った人の像がある。その人が帰ってくるのか、長い別離になるのか、永遠の別れになるのか、定かではないが、寂しさがあり、悲しさがある。去って行った者の方に身を置くなら、望郷の念があふれてくる。こうした像や悲しみや哀愁の情緒が大多数の人びとに共有されると感じられていた。

こうしたことが可能だった一つの理由は、アイルランドや韓国・朝鮮が植民地状況にあったからかもしれない。日本の場合、「唱歌」や「童謡」や「歌謡曲」によって、多くの人びとが悲しみや望郷の念を分かち合うことはできたかもしれない。しかし、『ロンドンデリーの歌』や『アリラン』のような歌は思いつかない。かつて韓国人の親しい学者仲間とカラオケや宿舎でよくいっしょに歌を歌った。韓国人の主導で『アリラン』を歌った後に日本側主導で『赤とんぼ』を歌ったが、この「童謡」は寂しさが目立った。「すごい迫力で歌うような歌ではまったくくない。他方、『故郷』を歌うとすれば、「志を果たして」のところなどで、違和感を伴うのも避けがたいだろう。

『故郷』や『赤とんぼ』、あるいは野口雨情の「童謡」が悲しみと望郷の念をどう捉えるかというところから、20世紀前半の「国民的」な歌について比較文化的な考察に踏み込んでいる。日本の「国民的な歌」の特徴を考えようとしている。ここで役に立つのが、「故郷」という概念の歴史についての考察だ。成田龍一（1998）の『「故郷」という物語』によると、「故郷」の概念が急速にゆきわたるようになったのは1880年代だという。この時期から、東京にいる同じ「故郷」の出身者が中心となり、ときに地元に残まっている者をも巻き込んで、「同郷」の人士が寄り集う機運が高まる。そして、90年前後に数多くの「同郷会」がいつせいに成立していく。

各地の人びとが他の地域と張り合うかのように同士を募りあい、同郷会の設立という形で全国で同時的に故郷意識、同郷意識が顕揚されていく。この場合の「同郷」の範囲は市や町とその周囲の郡といったほどの広がりだ。メンバーは官吏、教育者、医師、軍人、村長、役場関係者、学生といったエリートや地域指導層が主体であり、もっぱら男がその担い手だった。日本という「国」への強い帰属感を前提に「故郷」の意義が強調されている。それ

までも「ふるさと」の意識はあった。だが、新たな故郷の意識は「国民」の意識と強く結びついている。成田は『伊那郷友会雑誌』の1890年6月に刊行された第四号掲載の「能ク富岳琵琶ヲ貴重トスルト同時ニ能ク龍水駒嶽ヲ愛護スル人コソ 吾人ノ代議士ナレ」との言を引いている。「龍水」は天竜川であり、駒ヶ岳の麓を流れる天竜川に故郷伊那の自然の懐かしさを代表させているが、それは富士山・琵琶湖に代表される日本の自然の懐かしさと相互補完的なものと捉えられている。

同じ時期に石川啄木（1885-1912）は、「故郷の自然は常に我が親友である。しかし故郷の人間は常に予の敵である」と述べていた。啄木の「故郷」、岩手県渋民村は「時代閉塞の現状」として捉えられた1900年代の「日本」の縮図でもあった。およそ百年前、小林一茶（1763-1828）は「けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ」という句を詠み、「ふるさとは蠅すら人を刺しにけり」とも詠んでいる。一茶も確かにナショナリズム前期的な意識をもっていた（青木美智男 2013）。だが、啄木の「石をもて追はることく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆる時なし」という短歌と比べると、一茶の「日本」はまだ切実さがなく、彼自身が「ふるさと」に抱いた深い悲しみに直結するものではなかった。

おわりに

日本で多数の童謡が創作され、多くの人々に歌われた時代があった。それは1910年代から1960年代ぐらいまでのことだろう。この時期は近代化が進み、人口が都市に移住し、人々がふるさとを後にする時代であり、また大規模な戦争が起こった時期でもあった。

その頃の人たちは、ともに悲嘆を生きるという感覚をもつことが比較的容易だったように思われる。それは国民的な連帯の意識が色濃い時期でもあった。ともに悲嘆を生きるということは故郷喪失と望郷のテーマに惹かれることであった。母のふところを離れ、大都市や戦地でいのちを失うことが予想される時代でもあった。そこには確かに孤独があり、孤独に伴う哀愁がある。だが、帰っていきべき故郷の像を共有することはしやすかったのだ。

20世紀の後半を過ぎるうちに、国民的な連帯の意識はかなり薄れていっ

た。今では、共有される故郷のイメージはますますもちにくくなっている。それだけ個人化が進み、連帯の基盤を前提とすることがしにくくなっている。人々はおたがいがまずは他者同士であることを、前提にすることに慣れてきている。

にもかかわらず、故郷について歌いたいという欲求は多くの人のもっているようだ。人々の孤独が深まり、喪失と悲嘆はこれまでもまして痛切に感じられるようになってきている。そうであればこそ、孤独を癒し慰めとなるような何か、「魂のふるさと」にあたるものを強く求めるようになっている。

そこでは、もはや国民的連帯感も前提とされない。たとえば、2016年に公開され多くの観客を獲得した映画『この世界の片隅に』では、最初に『ロンドンデリーの歌』のメロディーが流れていた。もしかすると、それは『イメージング・グレース』でも『明日に架ける橋』でも『イエスタデイ』でも良かったかもしれない。グローバルに歌われる歌が「魂のふるさと」を想起させる時代となっているようだ。

ともあれ、歌がもつ力、悲嘆を癒しいのちの源を想起させるうたの力は衰えることはないだろう。人々がともに歌う歌を通して、同時代の悲しみと慰めについて考えていくことができる。そういう時代がこれからも続いていくと思われる。

注

- 1) 野口雨情についてとくに参考になったのは、古茂田信男 1992、上田信道（編）2005 である。
- 2) 恵心僧都、942–1017 年。
- 3) 拙著『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版、2012 年、参照。
- 4) 柳田國男 1971、所収『故郷七十年拾遺』。
- 5) 二木紘三のうた物語「ロンドンデリーの歌」http://duarbo.air-nifty.com/songs/2007/03/londonderry_air_2799.html。2017 年 9 月 12 日閲覧。

参考文献

- 青木美智男 2013：『小林一茶——時代を詠んだ俳諧師』岩波書店。
- 上田信道（編）2005：『名作童謡 野口雨情 100 選』春陽堂。
- ミルチャ・エリアーデ 1963（1949）：『永遠回帰の神話』未来社。
- 折口信夫 1944：「山越しの阿弥陀像の画因」『八雲』第三輯。
- 1965：『折口信夫全集』第二巻、中央公論社。
- 1968：『折口信夫全集』第二七巻、中央公論社。
- 金田一春彦 2015（1978）：『童謡・唱歌の世界』講談社文庫（主婦の友社）。
- 草野妙子 1984：『アリランの歌——韓国伝統音楽の魅力を探る』白水社。
- 古茂田信男 1992：『七つの子 野口雨情 歌のふるさと』大月書店。
- ジェフリー・ゴラー 1986（1956）：『死と悲しみの社会学』ヨルダン社。
- 島崎藤村 1999：『島崎藤村詩集』角川文庫。
- 島蘭進 2019：『ともに悲嘆を生きる——グリーフケアの歴史と文化』朝日新聞出版。
- 島蘭進・鎌田東二・佐久間庸和 2019：『グリーフケアの時代——「喪失の悲しみ」に寄り添う』弘文堂。
- 高松信英 2000：『現代語訳 観無量寿経・阿弥陀経：浄土への誘い』法蔵館。
- 天理大学附属おやさと研究所 2018：『天理教事典』第三版、天理大学出版部。
- 成田龍一 1998：『「故郷」という物語』吉川弘文館。
- 宮塚利雄 1995：『アリランの誕生——歌に刻まれた朝鮮民族の魂』創知社。
- 柳田國男 1971：『故郷七十年』『定本 柳田國男集別巻第三』筑摩書房。
- 渡辺裕 2010：『歌う国民——唱歌、校歌、うたごえ』中公新書。

Living Together with Grief:

Looking Back Over the Ages at Children's Songs

by Susumu SHIMAZONO

As modern science has spread and people's views of death change, a shared culture of mourning has been diminishing in Japan. Children no longer tend to experience going to funerals nor do they join in rituals of mourning for people close to them. However, after this initial decline in shared mourning, there still were songs sung with which all could share the common sorrow. Now this, too, may be rare.

In Japan after the Meiji Restoration, the first government attempted to teach children songs and nursery rhymes to share sadness, and in the Taisho Period people composed many nostalgic children's songs which were sung by a wide variety of people of various generations until the 1960s. This was a period when modernization and urbanization advanced and people experienced the loss of having a hometown. It is the author's view that during the last quarter of the twentieth century and after, the sense of national solidarity has been greatly diminishing in Japan. It is not easy nowadays for the general public to have a shared sense of "home". By and by as individualization advances, it may become more and more difficult to have a sense of solidarity with those around one. People may become accustomed to feel that others are distinct individuals from them.

In spite of all these changes, people still like to sing songs in which they yearn for their hometown or country. As loneliness increases and a sense of loss and grief becomes more and more acute, people seem to have a stronger need for healing and comfort. This suggests a perennial yearning for a "homeland of the soul" that might be one cause of the widening interest in grief care.